

養成期に身に付けたい「身体表現」の学修内容の検討

豊永 洵子

Examination of Learning Contents of "Body Expression" Attached to the Body during Training Period

Junko TOYONAGA

1. はじめに

(1) 領域「表現」のねらいと内容

幼稚園指導要領の基本は「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」と位置付けられ、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」(文部科学省)¹⁾と示されている。その上で、幼児教育の内容として「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域が設定されている。「領域」について保育所保育指針には、「保育士が子どもの発育発達を教育的な視点から捉える視点であるため、小学校の教科のように独立して扱われたり、特定の活動を示すものではなく、保育を行う際に子どもの育ちをとらえる視点²⁾」との記載がある。ここから、5領域とは複合的に複雑に、そして柔軟に絡み合っている必要があるといえる。特に表現の領域において横のつながりは、子どもの表現の幅を増やす為に重要になってくると考えられる。本研究において取り扱う「身体表現」は、5領域の「表現」に含まれる内容である。指導要領の中では「表現」のねらいとして、(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。が示されている。「表現」の内容の取扱いについて井上(2011)は、

美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などの感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することや、幼児の素朴な自己表現を教師は受け止め、生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむこと、また生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるよう配慮し、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるよう工夫する³⁾

とまとめており、このねらいを達成するための「内容」を、幼稚園指導要領では8項目、保育所保育指針では10項目挙げられている。(表1・2)

領域「表現」は、1989年の幼稚園教育要領の改訂により、それまで「音楽リズム」「絵画創造」と分断されていた内容が一つになったことが大きな転機となっている。(名須川ら、1994) この改訂を機に、現行の幼稚園指導要領及び保育所保育指針の内容も「表現」の方法として、「音楽」「言葉」「造形」「身体」など様々な事項を取り挙げられるよう示されている。しかしながら、

指導内容について具体的には示されておらず、実際に子ども達と関わる先生たちに一任されてしまっている状況であるといえる。

表1. 幼稚園指導要領の内容

幼稚園指導要領の内容 8項目
(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
(7) かいたり、つくったりするを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

表2. 保育所保育指針の内容

保育所保育指針の内容 10項目
(1) 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。
(2) 保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。
(3) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。
(4) 生活の中で様々な出来事に触れ、イメージを豊かにする。
(5) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
(6) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。
(7) いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ。
(8) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
(9) かいたり、つくったりするを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする。
(10) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。

(2) 「ダンス」という「身体表現」

「身体表現」という言葉をどのように解釈するか。「表現」の内容に「身体を使った」表現が組み込まれているものの、非常に曖昧な部分があると考えられる。身体表現の多様性について、井上 (2011) は以下のように述べている。

領域「健康」の、「いろいろな遊びの中で十分に身体を動かす」はリズムあそびと関連し、「人間関係」の「友達と楽しく活動する」は、わらべ歌遊びやごっこ遊びと関連し、「環境」の「自然や身近な事象に関心を持ち」は体でスケッチする。「言葉」の「絵本や物語などに親しみ」は体で表現するストーリープレイ、「表現」の「感じたことを動きで表す」など、身体表現は、他の領域全てと関連し、保育、教育の中に位置づけられていることがわかる。⁴⁾

この記述から身体表現の多様性が分かったと共に、その汎用性は、前述した幼児教育で示される5領域の複合的な重なり合いをつなぐ役割を担うことができるのではないかと考えられる。

ではここで、身体で表現をする主たる活動である「ダンス・Dance (舞踊・踊り)」の視点から、幼児教育における「身体表現」を捉えてみたい。ダンス (Dance) とは片岡 (1991) が「その語源に《生命の欲求：desire of life》という意味があるように、ヒトは様々な思いや欲求を身体で語りかけ、生きる証として踊り、踊ることによって他者と共感・交流してきた。」⁵⁾と述べているように、踊るという行為はヒトにとって、非常に原始的な営みのひとつであり、この意味からダンスは言葉以前に存在する身体での表現であると言える。しかしながら、ダンスの同意語として身体表現を捉えることは、幼児教育の内容として規定された「表現」の点に

において大きな誤解を招き、更にこの一方的な解釈は、内容の達成という点において、その汎用性を活かせなくなってしまう原因となり得るのではないだろうか。そもそも、ダンス (dance) という言葉の意味について、ルース・マレイ (1963) によると「一般の人々はこれらの言葉を長い間混乱して使ってきた」⁶⁾ と指摘している。この混乱が、子どもの表現活動におけるダンスの用語の定義とその内容との間で起きている解釈の不一致が起きているのではないかと考えられる。これについてルース・マレイは以下のようにも述べている。

「子どものダンス活動を表す用語としては「リズム」「リズム遊び」という言葉が使われ、一般的になっている。これは、ダンス活動全般を表す言葉としてのDanceが、一般的に使用されなかった限りにおいては理解できた。人々が理解しているDanceという言葉が意味しているものはいわゆる「ダンス」の学習であり、学校教育で実践されているダンスの創造的な活動は含んでいない。(中略)「リズム」は、ダンス表現のひとつの局面だけを表すためにつくられた言葉である。カムフラージュ (ママ) のため、あるいは便宜的に使われていたかどうかは別にしても、この「リズム」という言葉は、ダンスの根本的な体験を否定しダンスを誤った方向に導いただけである」(松本千代栄 訳 1963)⁷⁾

またダンスとは「リズムと運動の2つから成り立つとする包括的な概念の一局面を表す言葉にすぎない。」(ルース, 1963 p.146)⁸⁾とも述べている。ここから、幼児の「表現」内容としての身体表現を同意語としてダンスと捉えてしまう事が、現実的に起こっていることが容易に考えられる。実際に、現行の保育所保育指針の「表現」の中でも、身体表現について「リズムに合わせて体を動かしたりする」とあり、幼稚園教育要領においては「感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現したり(略)」と記載されており、「ダンス」との記述はみられない。しかしながら、ルース・マレイの言説から、身体表現の獲得のための一側面としてダンスを捉えていくことは、ダンスの根本的な体験をもって「表現」の内容を獲得する手立てとなるのではないかと考えられる。子どもたちの想像力を発揮した身体活動としてのダンスと、リズムというダンスの一側面を取り出した身体活動の視点を混同せずに、身体表現を理解することが、幼児期の表現を引き出すためのキーポイントとなることが考えられる。

(3) 幼児期の「身体表現」とは

1989年の幼稚園教育要領の改訂から、これまで、幼児教育における「身体表現」の在り方について、実践や研究が行われてきた。古市 (1996) は幼児の身体表現について「日本の創造性の教育の一步は、まず表現しても恥ずかしいことなど何もないことを幼児の時代に身体に刻み込ませることだ」⁹⁾ と述べ、これが将来に向けて「個性を生む」ということにつながるとしてその重要性を述べている。また、古市の研究から表3に示す12項目が抽出されている。この分類にみられる身体表現の内容は、前項でも述べた通り、単に「踊る」ことだけではないということに注目したい。幼児期の発育・発達の一つの内容で形成されるのではなく、「遊び」を中心に、子どもの周りにある様々な事柄が複雑に絡まり合って、成長へとつながっている。これは、「子どもはこの『遊び』という具体的・直接的は体験を通して、自分を取り巻く世界、そして自分自身についても理解していく (入江・榎沢ら 2007 p.5)」¹⁰⁾ というような提言からも明らかである。また、幼児期の発育・発達の前にある乳児期においては、まず「身体の発達」が著しく、言葉をうまく扱えない赤ちゃんたちは、全身を使った身体表現を通して、自分の意思

を伝えているのではないだろうか。5領域として「表現」が制定されたことで、身体を使った表現にも注目が集まってはいるものの、入江ら(2007)が述べるように、それまでの6領域が小学校以降の「教科」との関連としてとらえられてしまってきたため、「表現」が未だに「音楽」「図工」に頼ってしまっている現状は払しょくしきれていないのではないかと考えられる。

表3. 表現の側面

表現の側面(古市 1996を参考に作成)	
1	創造力増
2	感情表出
3	表現発表
4	模倣欲求
5	心の開放
6	同調動作
7	うそ世界
8	交流欲求
9	ごっこ遊び
10	感動体験
11	文化伝達
12	自己確認

(3) 保育者養成校における「身体表現」の現状

本研究の対象としたN女子大学では、「保育の表現技術I(体育)」として、幼児期の運動指導法に関する科目が通年で開講されている。しかしながら、N女子大のある愛知県近郊の保育者養成校の「身体表現」に関する教科をwebで検索した結果、授業の名称として「身体表現」がそのまま用いられているタイプ、「体育」という名称で開講されており、「身体表現」についての名称は用いられていないタイプ、「音楽表現」「演劇」に「身体表現」が含まれるタイプをみることができた。ここから、養成校において「身体表現」が一つの領域として確立するには至っていない状況がわかる。また、高原ら(2017)によると、保育者養成校において音楽系科目の中に最も多く「体を使った表現」が取り上げられていると報告されている。その内容としては、音楽教育家エミール・ジャック＝ダルクローズ(1865～1950)に学んだ、小林宗作と天野蝶が導入したりトミックやボディーパーカッションなどが挙げられる。

表4. 主な科目名称とシラバスからみた授業内容

	体育系	音楽系	保育内容系	児童文化系	保育技術系	
主 目 録	幼児体育 体育 幼児と運動 体育あそび研究 からだを動かすあそび、他	身体表現系 身体表現技術 リズム・ダンス表現 子どもと身体表現 動きのリズム、他	幼定音楽 音楽演習 音楽表現研究 音楽表現技術 子どもの音楽遊び、他	保育内容 音楽指導法 保育内容・健康 保育内容・芸術 保育内容研究、他	児童文化 子ども文化 子どものあそび文化	保育実践演習 保育方法論 保育実践演習 総合保育技術 保育実践特講、他
授 業 内 容	リズム遊び 身体を使った表現・表現遊び 鬼ごっこ遊び 伝承遊び ダンス ダンス 演習遊び 身体を使った表現遊び 音楽運動遊び ジャンケン遊び からだ遊び・運動遊び パタパタゲーム 組み体操・マスゲーム 棒ついで・棒ついで運動 わらべうた リトミック サーキット遊び 親子遊び・親子ダンス ふれあい遊び 遊戯	リズム遊び わらべうた ダンス うた遊び 季節・生活の中からの表現遊び イメージから動き 絵本から身体表現へ リトルタイム 親子遊び・親子ダンス 練習遊び 身体を使った表現遊び 空想・物語から身体表現へ 半遊び・稽古遊び ヒップホップ ジャンケン遊び 鬼ごっこ遊び 身体を使った表現・表現遊び ミュージカル・オペレッタ	半遊び・稽古遊び リズム遊び わらべうた リトミック ボディーパーカッション うた遊び からだ遊び・運動遊び 稽古遊び 身体を使った表現・表現遊び ダンス 鬼ごっこ遊び 音楽・運動会 ふれあい遊び ミュージカル・オペレッタ ボディーパーカッション	身体を使った表現・表現遊び 半遊び・稽古遊び リズム遊び わらべうた からだ遊び・運動遊び 季節・生活の中からの表現遊び 稽古遊び 伝承遊び リトミック 創作 ミュージカル・オペレッタ 音楽会・運動会 ふれあい遊び ボディーパーカッション	児童文化 子ども文化 子どものあそび文化	身体を使った表現・表現遊び 伝承遊び ジャンケン遊び 半遊び・稽古遊び わらべうた からだ遊び・運動遊び ふれあい遊び
					その他 レクリエーション・ダンス レクリエーション・演習	

出典：高原ら(2017) p.73

一方で、幼児期の身体での表現について、その重要性が唱えられ、身体での表現であるダンス領域では、幼児期に関する指導の研究や実践が活発にみられるようになったことも事実である。

日本のダンス教育の中心的な存在である、日本女子体育連盟が発行する「女子体育」で、平成21年度から発行されている「保存版！ダンス指導ハンドブック」で取り上げられた内容を検証した。平成21年度のハンドブックの目次をみると（表5）平成20年の学習指導要領改訂から間もないこともあり、主に教材の紹介に特化した構成となっていることがわかる。この地点で、ダンス領域においても幼児の身体表現に対する教材研究や実践が少ないこと示唆される。

表5. 平成21年「保存版！ダンス指導ハンドブック—初めての指導・一歩進んだ指導」目次

平成21年 初めての指導・一歩進んだ指導			
導入	表現・創作ダンス	リズムダンス・現代的なリズムのダンス	フォークダンス・日本の民謡
ダンスにつながる「体ほくし運動」 ダンスにつながる「多様な動きをつくる運動あそび」 からだで遊ぶ～動きへ リズムから表現へ～2つの入り方・4つのくずし～ ポーズ遊びから「群像」へ 割り箸を使って一感じ合って動く～	動物のいろいろ ジャングル探検—カルタを使って— 忍者の表現 「大変だ…！」（激しい感じの表現） オリンピックに参加しよう（スポーツの表現） 2人組のいろいろ・対決の表現 タッチ&エスケープ（動と静の連続） 対極の動きから「走る—跳ぶ—転がる—見る」 群の課題「彫刻の森」 群のテーマ「見る、集まる、離れる」 新聞紙①②③ 見立ての世界「もの」を使った表現	ロック（基本）リズムに乗ってはずんで踊ろう ロック『交流手たきダンス』 サンバ（基本） サンバ（応用編）『風になりたい』 ヒップホップ（基本） ヒップホップ（発展編）フリーズ・ブレイキン ヒップホップ（ダンスバトル・アップロック）	バージニア・リール（アメリカ） ハーモニカ（イスラエル） 大漁唄い込み〈青太郎節〉（宮城県） 郡上踊り〈春駒〉（岐阜県）

しかし、平成25年に発行された「ダンス指導ハンドブックⅤ理論と実践をつなぐ表現・ダンス指導事例集」（表6）の目次より、実践事例として幼児の身体表現に着目した実践が行われていることがわかる。現行の指導要領の改訂より5年が経過したことが、指導内容の紹介に留まらず、発育発達に応じた表現・ダンスの実施を目指した構成になっていることも明らかである。また、冊子内に掲載されている他の事例においても、幼児や児童の実践事例を多く見ることができる。しかしながら、実践事例の留まってしまい、幼児期の身体表現に関する研究論文の発表は少ないように感じる。このように、児童に向けた課題研究や実践研究は進んでいるように見えるが、幼児期の身体表現の指導内容への言及や、実践研究については、未だ未熟であるということが伺える。

表6. 平成25年「保存版！ダンス指導ハンドブック」目次

平成25年 理論と実践をつなげる表現・ダンス指導事例集	
—幼稚園—	「カードを使って遠足ごっこ⇒スケッチ
—小学校—	「忍者でござる」 創作「アートでダンス」 「リズムダンス」⇒リズムにのってノリノリダンス！リズムでde即興
—中学校—	中学生になって初めて取り組む現代的なリズムのダンス 「走る—見る」「ディズニーランドに行こう」 導入としてのフォークダンス
—高校—	創作ダンスの題材「二人のストーリー」「新聞ボール」 男子がイキイキと踊れる指導のコツ
—特別支援—	知的障がい児の表現運動
—大学—	中学・高校教員養成系のための指導事例 「現代的なリズムのダンス」
—生涯スポーツ—	一生感動！～「姿勢」と「呼吸」を意識して～ いつまでも動ける喜びを！

また、養成校における「身体表現」に関する授業実施の必要性について、幼児教育「表現」

についての学びの視点から、新山(2015)は「幼稚園・保育所における幼児の遊びの主たる内容は、表現的な活動であり、学生が表現の授業で学んだことは保育実践の核となり得る。新任の保育者の実践には、養成期の学びが強く反映されると考えてもよい。」¹¹⁾と述べているように、養成期に学生自らが「身体表現」の楽しさや本質的な意義をその身体を持って実感することの重要性を示唆している。しかしながら、秋田(2010)が「芸術として表現を求めているわけではない保育者や養成校の学生を対象とした活動でも、やはり、多くの人が、多くのものにとらわれ過ぎて感じるように感じる」¹²⁾ということから、「保育者や養成校の学生自身が身体表現の広がりを知る」きっかけの不十分さを垣間見ることができる。更に秋田は、「自身の想像力や想像力を十分に発揮できないでいることが、現場での保育実践でも、子どもたちに模倣からその先へ広がる表現の豊かさや多様さを見逃してしまうことになる」¹⁴⁾とも指摘している。養成校で学ぶ学生たちは「身体表現」のプロになるわけではない。しかしながら、幼児教育における身体表現について、指導法の獲得以上に、養成期の学生たち自身がその根源的な面白さや広がりを経験することが、より重要なのではないかと考えられる。

そこで本研究では、子どもの「即興的」で「自由」な表現力を引き出す指導を行うために、養成期の「身体表現」に関する授業で、どのような内容を組み込み、何を体得すべきなのかという問いを、現代的で同時代的なダンスであるとされている「コンテンポラリーダンス」の手法を用いた授業実践より考察し検討する。

2. 方法

幼稚園及び保育者養成校に通う156名を対象として開講されている「保育の表現技術Ⅰ(体育)」の前期授業を調査対象とした。活動に際して、N女子大学文学部児童教育学科(愛知県)の学生の協力を得て行った。筆者の担当した2クラスに関して、身体表現の授業15回のうち、第7回、第8回の授業で行った内容の分析を行った。授業は、毎時間ビデオカメラで撮影を行い記録した。また、授業直後「感想シート」の記入を実施した。この記述内容から、学生たちの内観についての分析を加えた。

授業の内容として取り上げる「目線で動く」「体の部分で動く」「シンクロ・ワーク」について、「目線で動く」は2人組のうちリーダーは手でチョキを作り、フォロワーの目と指先に15cmほど距離を保つ。その距離を崩さないように、フォロワーはリーダーについていくという活動である。「体の部分で動く」は、2人組のうち、リーダーはフォロワーの体の「部分」をタッチし、フォロワーはタッチされた部分のみを動かしていく。応用として、フォロワーが次のタッチまで動きを辞めずに行うという段階も行った。最後に「シンクロ・ワーク」は、向かい合ったまま相手の動きを真似していく。その時に、なるべくゆっくり動いていくことで、リーダーとフォロワーという関係を崩し、同調するという活動である。(図1・2参照)

3. 結果・考察

(1) 授業の内容ビデオ分析から

以下に示すのは、平成29年度「保育の表現技術Ⅰ(体育)」の前期授業のシラバスである。

全15回のうち第7回、第8回の授業で行った授業実践の内容を分析した。尚、本授業の導入では、コミュニケーションを目的とした「体ほぐしの運動」を取り入れることで、受講者の身体だけでなく、人間関係や心の柔軟体操を行っている。

表7. 「保育の表現技術Ⅰ（体育）」の前期授業のシラバス

1回目	4月12日	オリエンテーション	多目的室
2回目	4月19日	体力テスト	体育館
3回目	4月26日	「身体表現」の考え方	多目的室
4回目	5月17日	からだほぐしの運動	多目的室
5回目	5月24日	リズム・表現遊び 言葉をつかって	多目的室
6回目	5月31日	リズム・表現遊び 音楽をつかって	多目的室
7回目	6月7日	リズム・表現遊び イメージをつかって	多目的室
8回目	6月14日	リズム・表現遊び 一人、ペアでの活動	多目的室
9回目	6月21日	リズム・表現遊び 複数人での活動	多目的室
10回目	6月28日	リズム・表現遊び モノを取り入れた活動1	多目的室
11回目	7月5日	リズム・表現遊び モノを取り入れた活動2	多目的室
12回目	7月12日	グループ創作（グループ・テーマを決める）	多目的室
13回目	7月19日	グループ創作（動きのモチーフを決める）	多目的室
14回目	7月26日	グループ創作（グループ練習）	多目的室
15回目	8月2日	期末課題（創作発表）	多目的室

対象とした2回の授業では、「目線で動く」「体の部分で動く」「シンクロ・ワーク」を行った。この3つの内容は、昨年度から継続的に観察調査を行っているコンテンポラリーダンスのワークショップ等によく使われた内容を、研究者独自に改変したものである。いずれも、小学校低学年向けの内容ではあるものの、村田（2011）のいう「4つのくずし」における「体のくずし」「人間関係のくずし」が可能な内容である。¹³⁾ また、村田は「4つのくずし」について「くずす（変化）ことで、動きはダイナミックで自然に表現的になる」と述べている¹⁵⁾ ことから、「身体表現」への新たな気付きを得られるのではないかと考える。また、授業は、全体の中盤で導入したことから、科目名は「体育」となりつつも、受講者は「身体表現」に関する内容であることを、十分に理解できている状況であると推察される。また、毎時の始めの導入では、ウォーミングアップにあたる活動を行いその後、内容に入った。表現の活動における導入の必要性について新山（2011）が「模倣や変身を楽しむためには、日常から非日常への切り替えが大切で、体ほぐしやウォーミングアップの時間を十分にとり、表現へ向かう準備を入念に行う必要がある。」¹⁴⁾ と述べている。対象の授業内でも、この手法を取り入れたことで、受講者の気持ちの切り替えや表現活動に向かう姿勢が自然と出来上がっていたと考える。

内容の始めに授業者が見本を見せ行った為、実施事項に関して理解できない者はいなかった。「目線で動く」において、時間の経過とともにリーダーの動きに変化が見られた。図1の写真に示すように、始め棒立ちであったリーダーの体は、だんだんとフォロワーの動きと連動してくる様子が見られた。この動きの変化により、フォロワーの動きはより自由になっていったと考えられる。更に、隣り合ったペアの動きが連動している様子も見られたことから、フォロワーは動きを選択するときに、周りの動きを自身の動きに反映させていることが伺えた。

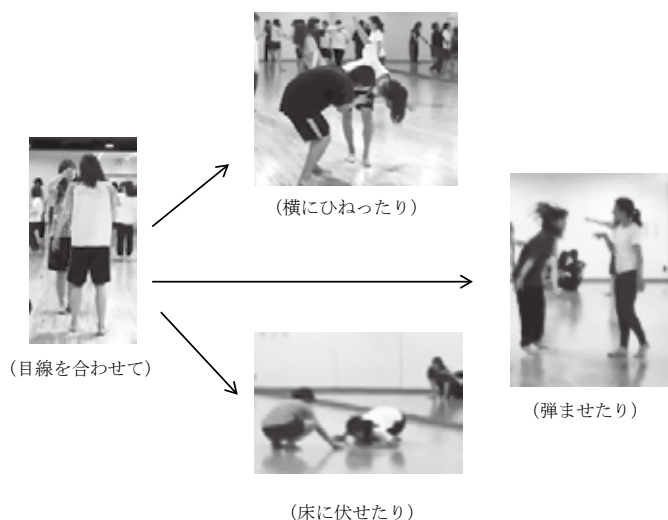
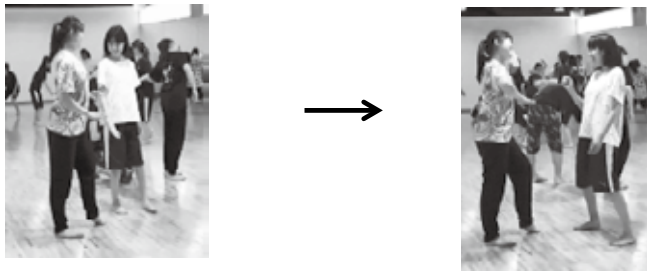


図1. 「目線で動く」

「部分で動く」の活動においては、リーダーの身体的な動きの変化は見られなかったが、相手を観察し、タイミングやさわる場所を認知している様子がうかがえた。また、触られる側は、「動かす場所のヒント」「動き方の指定」があったことで、リーダーから示された指示に対して、比較的容易に応答することができていた。応用編である「動き方のヒント」を外した内容の場合（触られた部分を動かし続ける）においても、フォロワーが非常に積極的に応答している様子もみられた。リーダーは、この様子を伺いながらある程度の子測を立てながら指示を出しているのではないと思われる場面も見受けられた。

「シンクロ・ワーク」では、始めはただの真似っこ遊びに留まってしまっている様子が見られた。しかし、授業が進むにつれ動くスピードがゆっくりになり、上下の動きや、バランスをとる動きなどが見られ、この活動で実感してもらいたい内容の活動に近づいた様子であった。前述までの活動とは異なり、2人（もしくは複数人）の役割が明確でなかったことが特徴である為、観察だけではその変化が見えにくい結果となった。



(触られた部分を好きな方向へ動かす)

図2.「部分で動く」

(2) 学生の感想シートの内容から

受講学生に対して毎授業後に行った、「感想シート」の記述内容より、学生自身の気づきを検証した。表8は「目線で動く」表9・10は、「体の部分を動かす」の感想の一部である。

表8.「目線で動く」

目線で動く
目でひたすら追うのも、体と一緒についていけないと追いつかないと思った。
実際にやってみると、前後左右に動かすのが難しすぎました。
指2本についていくのが、転がるのが難しかった。
指で人を操る動作は先生がやっているのを見て、ダンスをしているように見えて驚きました。
友達に操られたり、友達を操るのが楽しかった。面白い動きをさせようとすると余計に難しかった。ピースについていけるように必死に食らいつこうと頑張った。
ピースのやつは操る側はどうしたらいい動きになるか考えながらやると楽しかった。目で追うだけでいろいろな身体の部分の部分を動かすことができた。

「目線で動く」活動において、多く見られた感想はリーダーになった時の動き方に中止したものである。自分の意思を、言葉ではなく、尚且つ触れない状況で相手に伝えることの難しさについての記述が多かった。しかしながら、伝わりづらさから生まれる相手の「予想外の動き」にたいして、肯定的な意見を述べる場合がほとんどであった。フォロワーとして操られる側の記述としては、「必死についていった」というように、自分の体を動かす事への意識より、目の前にある指標に対して意識を置くことで、その後にある身体という感覚だったのではないかと推測された。

表9.「体の部分で動く」の感想より (ダンスの発見)

体の部分で動く
動きは動きでもロボットのようにかくかくした動きや、お花のようななめらかな動きいろいろあつて、それらの動きを重ねて表現するのが楽しかったです。
人にさわるのも、自分が思うような動きをしてくれないところもよかった。
身体の一部を触るって簡単なことの延長上にダンスがある感じがした。ちょっと身近なものだと思った。
体がまるでロボットのように動いて、とても楽しかったです。どうやって動かすかで表現力も広がるなと思いました。

表10. 「体の部分で動く」の感想より (体の再発見)

体の部分で動く
新しく発見したことは、 <u>タッチされたところ、人間自由に動かすことができるという事です。</u>
<u>体をさわるだけで、いろいろなものに見える動きができることがわかったし、動きがガチガチだったり、なめらかだったりの差が面白いなと思った。</u>
今日は、 <u>体の部分を細かく動かすことをやってみて、関節ってこんな風に動かせるのかと思いました。</u>
動きを連続させることで、 <u>触れられたところを一定方向に動かしているだけなのに、ダンスをしているように見えたのはすごいなと思いました。</u>
今日やったことはいつもより難しかったです。
関節を動かすのは、 <u>意外にも難しいことがわかりました。</u>
関節を動かすと自然に滑らかになってきれいだなと思いました。

この授業後の感想として多く見られた点として、「体の再発見」「ダンスの発見」が挙げられる。受講者の受講アンケートより、ダンス経験のないもの、ダンス経験があったとしても、いわゆる「表現型ダンス」の経験者はほとんどいない。また、中には「体育・スポーツ」に関して多少の劣等感を持つ学生も存在している。このような学生たちにとって、振付ではない動きのヒントを与えることが、既定の「ダンス観」から少し抜け出すきっかけとなっていたのではないかと想像できる。また「関節ってこんな風に動かせるんだ」という気づきに対する感想が多く見られた。ここから、自分自身の「体への気付き」もあったことがわかる。これにより、様々な動きを行う上での壁を打ち破るきっかけができていないかと推測される。

表11. 「シンクロ・ワーク」言葉を用いないコミュニケーションに関する記述

シンクロ・ワーク
シンクロさせることは思っているよりも、 <u>難しく、円で行っている時と縦で行っている時のやりやすさも変わってきて面白かった。</u>
<u>体を大きく動かすことはよいことだと思う。</u>
<u>ゆっくり動くことで、どっちがまねしているのかやっている本人もわからなくなってくるような感覚があって面白かったです。横一列になって正座してペコッとするのが難しかったです。</u>
<u>ゆっくり動くと、どちらに合わせているのかわからなくて面白かった。みるのも実践するのも楽しかった。</u>
相手の動きを真似して、 <u>リンクさせるというのがすごくおもしろかった。</u>
<u>違うグループのを見ていると、相手の動きを真似するとき、目で追ってしまうと、他の人に真似ていることがばれるんだろうと感じた。</u>
<u>友達とやっている中で、先に動く人、真似る人、言葉にせず何度も交代するのが気持ち悪く、おもしろかった。</u>
<u>同じ動きをするということで、最初はリーダーを決めていたけど、だんだんと相手につられたりしてなかなか面白かったです。</u>
<u>4人で動きを合わせようとするのは難しく、誰が動き出すかわからなかったのが、むずかしかったところかな？</u>

表11・12は「シンクロ・ワーク」の記述である。いわゆる、「真似っこ遊び」に近いこの内容は、ゆっくり動くことで他者との距離感の変化や、「操り・操られ」の関係性を楽しむ中で、今までの自分の身体知にはない方向へ体を動かすことのアイディアを知ることができる。限られた時間の中の授業であるため、全員が同じ気付きを得ることは難しいが、その中でも「シンクロすること」に関する記述と活動内における、他者との関係性に関する記述を見ることができた。

表12. 「シンクロ・ワーク」シンクロすることの感想

シンクロ・ワーク
どっちが動かしているのかわからないぐらいになるとびったり息があっているのだと感じた。言葉を使わなくても、意外と同じ動きができるんだなと気づいた。人のまねをするのも、まねしてもらうのも楽しい。
言葉を発することなく目を見て感じながらシンクロするのが、とても不思議な気分になったし面白かった。
人のまねをするだけでダンスをしているように見えるのが、新発見で面白いなと思いました。言葉にしなくても、人と息を合わせることがすごいと思ったし、おもしろかったです。

「シンクロすること」の面白さに関する記述では、実際の活動自体である、人との距離感の違い、まねすることへの難しさ等がみられた。また、「言葉を使わないコミュニケーション」に関する記述では、その面白さに気付いたり、無言のシンクロの奇妙な感じを「面白い」と感じる記述が多くみられた。ここから、日常にある関係性の変化を、必然的に体験することになるものであったのではないかと推察される。また、その日常とは異なる感覚に気付いた時に「面白い」と感じるに至ったのではないかと考えられる。

(3) 観察及び記述内容から

授業中及びビデオを用いた観察と、授業後の記述内容から本研究において取り上げた授業内容において、学生たちの学びや気づきを以下に考察する。

①動きに夢中になる

「目線で動く」及び「シンクロ・ワーク」において、学習者自身が「どのように動こうか」と考えるのではなく、何かに合わせて、もしくは何かにつられて動くことで「気が付いたら」動いていたという状況を作り出すことにつながっていたのではないかと考えられる。記述内容からも「必死だった」というような言葉が見られ、観察においても、夢中になってのめり込んでいる者ほど、身体の向きや状態を空間の中で大きく変化させながら「踊る」ことができていたように見受けられた。

②客観的にみる「身体表現」の面白さ

「相手が思った方向に動かなくて」や「ダンスみたいで面白い」というような記述から、ペアとなった（あるいはグループになった）相手の動きをみて、感じたことへの気づきが感想として多くみられた。もちろん、自身の動きへの気づきも大切であるが、一緒に動いていく友達の動きを通して、自己を再認識することへの気づきをみることができた。ここで注意しておきたいこととして、決して「鑑賞する」の面白さに留まっていないということが挙げられる。本研究の調査対象の授業内では、ペアやグループでの活動が多い。また、取り扱った内容は、「見る一見られる」の関係の構築ではなくお互いに作用しあう活動であった。学校ダンス教育において「鑑賞」は重要な要素のひとつではあるが、活動内で相互に作用しあい、その中で「自分」を知覚することの必要性が伺える結果となった。

③非日常的な感覚の体験

記述内容にみられた、「目を見て感じながらシンクロするのが、とても不思議な気分になった」

という感覚は、言語で意思疎通を行う日常とは、少し異なったコミュニケーションの方法への気付きではないかと考えられる。「踊る場が“非日常の変身できる空間”となるようにしたい。(村田 1996 p.139)」¹⁷⁾と述べられるように、ダンスの学習にとって「非日常」を創り出すことは、授業の導入ともいえる重要事項であるといえよう。これに加え、空間だけでなく「非日常感覚」を体験することは、表現の扉を開くにあたって必要なことではないかということが推測された。

4. 総括と課題

本研究は、養成期における「身体表現」の学びの中で学ぶべきダンスの本質的な面白さを探るために、同時代的なダンスといわれるコンテンポラリーダンスに分類される手法をヒントに授業実践を行った。映像を用いての授業観察、及び授業後の記述の内容から、①動きに夢中になる。②客観的にみる「身体表現」の面白さ。③非日常的な感覚の体験。をもって身体表現の面白さを知覚しているのではないかを推察された。このように、受講者は、身体の動きが変わることと同時に心が動くことと考えられ、そのために羞恥心を忘れられるような要素を組み込む必要性が考えられた。コンテンポラリーダンスの手法を導入することによって、学習者に表現そのものを行っているのではなく、ある種の運動を行っている感覚を与えることができていたと推察され、その後音楽やテーマなどを上乘せることで、その運動が「表現」につながっていると、知覚することができていたのではないかと考えられた。このように、身体表現の学習の際、「自由」以前に枠を設けることや、見本をつくること、動き自体を考え過ぎない状況を提供していくことがポイントとなると考えられた。

しかしながら、今回の結果について、コンテンポラリーダンスが用いている手法ではあるものの、一概にそれがジャンルのテクニクとは言い難いことが浮き彫りとなった。近年、多くの地域コミュニティーへのワークショップや学校アウトリーチで活用されているジャンルが「コンテンポラリーダンス」であるという社会的な動向も踏まえ、子どもの豊かな表現の扉を開くために養成期の学生たちが学ぶべき「身体表現」の内容について、「何が表現の扉を開くのか」という点の分析を更に進め本質について考察を深めたい。

注釈

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領 (2008)
- 2) 厚生労働省：保育所保育指針解説書 (2008) p.65
- 3) 井上勝子：豊かな感性を育む身体表現遊び, ぎょうせい, p.8 (2011)
- 4) 前掲書 (3) p.9
- 5) 片岡康子編：舞踊学講義, 大修館書店, p.3 (1991)
- 6) Ruth Lovell Muray : Dance in Elementary Education (1963) 松本千代栄 訳：ダンスの学習法 (1973) p.7
- 7) 前掲書 (6) p.5-6
- 8) 前掲書 (6) p.146
- 9) 古市久子：幼児の身体表現活動における諸側面についての一考察, エデュケア, 16, p.19 (1996)
- 10) 入江礼子・榎沢良彦：保育内容表現【第2版】, 株式会社建帛社, p.5 (2007)
- 11) 新山順子：保育者養成における人との関わりから展開する即興的な身体表現の実践：兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科, 博士論文, p.6 (2015)
- 12) 秋田有希湖：学生の身体表現—影との出会い—, 豊橋創造大学短期大学研究紀要, 27, p.1 (2010)

- 13) 村田芳子：新学習指導要領対応 表現運動・表現の最新指導法，小学館，p.12（2011）
- 14) 新山順子：保育者養成における身体表現授業の学びと保育実践への有用性分析，岡山県立大学健康福祉学部紀要，18，p.25（2011）

参考文献

- 赤松喜久・日野公美子（2001）舞踊における身体—芸術性の視座から—，大阪教育大学紀要第V部門，50，1，pp.89-98
- 入江礼子・榎沢良彦（2007）保育内容表現【第2版】，株式会社建帛社
- 高野牧子（2017）レジョ・エミリアの幼児教育における身体表現性，山梨県立大学人間福祉学部紀要，12，pp.83-94.
- 高原和子・瀧信子 他（2017）保育者における身体を使った表現（身体表現）指導の実態，福岡女学院大学紀要，人間関係学部編（18）
- 新山順子・高橋敏之（2013）保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題，兵庫教育大学教育実践学論集，15，pp.79-87
- 名須川知子・池田裕恵（1995）幼児の身体表現の「意味」についての研究
- 二見美千代（2017）リトミックの特徴とその理念についての一考察—リズム・ソルフェージュ・即興—千葉敬愛短期大学紀要（39）
- 乗越たかお（2006）コンテンポラリー・ダンス徹底ガイドHYPER，作品社

